

梅雨が明けて本格的な夏になる「小暑」。2026年の小暑は7月7日から始まります。

次の節気「大暑」が始まる前日の7月21日頃までの約15日間は小暑の期間です。

田植えが一段落し、暑さが本格化する小暑の季節は、昔から農作業の疲れを癒し、体力をつけるために各地で様々な行事が行われてきました。

現代でも地域の夏祭りや盆踊りを通じて、暑気払いを楽しむ風習が根付いています。この時期は七夕とも重なり、全国で夏の訪れを告げる夏祭りや花火大会が本格化し始める、心躍る季節です。

日本の祭り（夏祭り・秋祭り）は、季節ごとの自然や農業と深く結びついており、目的や楽しみ方が異なります。

秋祭りは主に収穫の秋に行われる感謝祭です。

農作物の豊作を感謝する意味が込められています。



横浜臨港パーク花火大会

一方、夏祭りは主に7月から8月に行われるお祭りで、主に疫病退散や厄除けを目的とした行事が多いのが特徴です。

夏の暑さを和らげるための霊を慰める行事とも言われています。

暑い季節を楽しむために、「打ち上げ花火」や「盆踊り」「屋台」など、多くの人々が集まり盛り上がるイベントとなっており、浴衣の着用も夏祭りの特徴です。

「楽しみ」や「活気」もあり地域の人々が集まり、互いに交流を深め、長い夏を元気に過ごそうとする目的もあります。

涼を求める人々にとっては楽しみの一つとなっています。

「小暑」のうだるような時期に思わず求める、美しい涼の景色を詠んだ歌を紹介。

（詠み人知らず『万葉集』3837）

（原文）久堅之 雨毛落奴可 蓮荷尔 淳在水乃 玉似く有将>見

（訓読）ひさかたの雨も降らぬか蓮葉（はちすば）に溜まれる水の玉に似たる見む

（意味）雨が降って欲しいですね。蓮の葉にたまった水が玉のようになるのを見ましょう。

「蓮始開」の時期にぴったりなこの歌は、雨の降らないカンカン照りが続いた頃に詠まれたようです。

「ひさかたの 雨も降らぬか（ひさしぶりの雨が降らないかな）」

という最初の一文に、祈るような切実な心地を感じます。

でも、そんな中で求めるのが「喉の渴きを潤す」ことでも

「実りの田畑を潤す」ことでもなく、

「蓮の葉の上に溜まった雫が真珠みたいに見える」と

詠んでいます。

